



第24号
2019.3

青少年赤十字 賛助 ひろしま

青少年赤十字賛助奉仕団信条

1. 青少年赤十字の充実発展に協力奉仕する。
1. 赤十字思想の普及啓発に努め、平和な社会の実現に寄与する。
1. 志を同じくする人々と手を取りあい、研鑽に努める。

発行 広島県青少年赤十字賛助奉仕団

〒730-0052 広島市中区千田町2-5-64

事務局 日本赤十字社広島県支部

TEL (082)545-5011

FAX (082)240-2741

青少年赤十字の活躍に寄せて



広島県教育委員会教育長

平川理恵

平成30年7月広島県豪雨

災害により亡くなられた方々に謹んで哀悼の意を表しますとともに、被災された方々に心からお見舞いを申し上げます。

また、青少年赤十字の関係者の皆様方におかれましては、発災直後から災害対策本部を設置し、救護班の派遣や救援物資の配布などに尽力され、多くのボランティアの方々と共に被災者を支え、復興活動に多大な貢献をされていることに対し、深く敬意を表します。

青少年赤十字は、児童・生徒が赤十字の精神に基づき、世界の平和と人類の福祉に貢献できるよう、日常生活の中での実践活動を通じて、いのちと健康を大切にする、地域社会や世界のために奉仕すること、世界の人々との友好親善の精神を育成することなどを目的として活動されています。加盟校におかれましては、「人道」という赤十字の理念の下、子供たちの人間尊重の精神や社会の一員としての責任と自覚を養い、異なる文化や習慣を越えて世界の仲間と仲良く生きる力の育成に取り組んでおられることに対して、感謝を申し上げます。

さて、県教育委員会では、「広島で学んで良かったと思える日本一の教育県の創造」を目指し、平成26年に策定した広島版「『学びの変革』アクション・プラン」を平成30年度から全県展開し、学んだ知識

を活用して、他の人と協働して課題を解決することを重視した子供たちの「主体的な学び」を促す教育活動の充実に取り組んでいます。

加盟校の皆さんは、ボランティア活動や国際交流などに取り組む中で、課題に「気付き」、課題解決の道筋を主体的に「考え」、仲間と協力して一歩ずつ「実行する」ことを学ばれており、このことは広島県が推進している「主体的な学び」と軌を一にするものです。これからも「気付き、考え、実行する」力を自分たちの生活の中でも生かしながら、周りの人たちと共に生きることの大切さを広げていただきたいと思います。

災害を通じた青少年赤十字活動の実践

日本赤十字社広島県支部事務局長

泉水 直



賛助奉仕団の皆様には、平素より青少年赤十字の普及・発展並びに赤十字事業へのご理解とご協力を賜り、厚くお礼を申し上げます。

さて、昨年7月の記録的な豪雨災害は、広島県を始め、西日本の広範囲に渡り甚大な被害をもたらしました。

私も赤十字は、発生直後に災害対策本部を立ち上げ、全国の支部の応援を受けながら、直ちに医療救護班を被災地に派遣し、約1か月間、全国から救

護班30班、延べ822名の赤十字職員が、総力を挙げて救護活動に当たりました。その後も、被災地への物資の輸送や、被災者や避難所職員に対する心のケア活動も行ったところです。



広島県安芸郡坂町小屋浦地区にて
救護班が在宅巡回



広島県支部の災害対策本部にて
救護班の全体ミーティング

ま

た、災害発生直後から、県内の赤十字加盟校におかれましては、生徒・児童自ら、自分たちに何ができるかを考え、「人間の命を救いたい」、「困っている人を助けたい」という人道の精神のもと、積極的に募金活動やボランティア活動を行って下さいました。



JRC(青少年赤十字)加盟校の
高校生による救援物資搬出

私自身も何校かの学校から、直接、義援金をお受けしたところです。こうした活動に、深く敬意と感謝の意を申し上げるとともに、平素からの指導者、先生方のご指導の賜物と感じている次第です。

こうした青少年赤十字の活動を通して、人の苦しみや痛み「気づき」、同じ人間としてどうすればよいかを「考え」、自分に出来ることを、勇気をもって行動する「実行の人として」、是非とも、成長していただきたいと願っています。

広島県支部としては、こうした様々な青少年赤十字の活動を、幅広く県民の皆様により理解し周知

していただくことにより、加盟校がますます拡大し、青少年赤十字の輪が一層広がっていくことを願っています。

青少年赤十字の活動期間は長くはありませんが、優しさや思いやりといった根柢の部分は、今後生きていく上での大きな糧となるものと信じています。

広島県支部としても、賛助奉仕団の皆様と密接に連携し、青少年の育成を全力で支援して参りたいと考えています。今後とも、青少年赤十字活動の更なる飛躍に向け、皆様のご支援、ご協力を賜りますようお願いよりお願い申し上げます。

(参考) 平成30年7月広島県の被害状況の概要

死亡・行方不明	114名
重傷・軽症	127名
全壊・半壊・一部損壊	5815件
床上浸水・床下浸水	7935件

青少年赤十字の実践目標の奥深さ

尾道幼稚園長 坂井正男

青少年赤十字の実践目標に「健康・安全」「奉仕」「国際理解・親善」がありますが、これらはいずれも人類が生存を継続するための基本的にして不可欠のものです。生物としての人間は「生命」が断たれると存在しなくなりますし、「安全」は生命維持のための重要な前提となります。

次いで、「奉仕」は「利他」すなわち他の人の利益のために行動する。現代風に言えばボランティア精神ということになりますが、これは人類以外の生

き物にはみられません。京都大学総長の山極壽一さんの話では、人間はもちろん猿でも身を保ちて子どもを守りますが、動物の場合血の繋がったわが子だけです。見知らぬ他人のために被災地に向き、助けるのは人間だけだそうで、人間特有の「共感」や「同情」によるものだそうです。人間の先祖が天敵のいない森から天敵の多い草原に移動してから互いを守るために身に付いたものであり、このことから父親も子育てを担うようになり、ここから家族の原形ができ、やがて地域共同体、国家へと発展したと考えられます。これにより人口は飛躍的に増加することとなりました。

そして、3番目の「国際理解・親善」ですが、これは「利他」とは逆の意味で人類しか持ち得ない欠点、大量殺戮すなわち戦争と関連があります。動物は自分が生きるための必要最小限しか殺しませんが、人類はこれまでの歴史の中で戦争や紛争が絶えた年はないといわれます。紀元前の話ですがカルタゴという通称国家は、ローマにより消滅させられました。このようなことを無くすためには、国を超えて互いに認め合い、理解し合い、友好的な関係を結ぶしがあります。これはこうした意図をもって教育することにより身につくものと思われまます。

こうしてみると青少年赤十字の実践目標は全ての人類の生存のために繋がっており、どれ一つが欠けても人類は生き続けることが困難になると思われまます。しかし、近年の私たちの生活の変化により、人類が築き上げてきた人間関係を構築するのに必要な感情を喪失し、新たな危機を迎えることが危惧されています。そのため、青少年赤十字の精神を生かし

た教育の重要性がますます高まっていると思われまます。最近私はこの実践目標をいつ、誰が考え出したのだろうかと思いをめぐらせております。

（日本赤十字社広島支部研究指定校報告）

「つながり」を育む防災教育の取組



安芸太田町立筒賀小学校
教諭 西廣直明

〇はじめに

本年度、私は3・4年生複式学級の担任としてスタートした。児童数は3年生7名、4年生5名、計12名。複式ではあるものの、極小規模の本校では最大人数の学級である。本校では低学年生活科と中・高学年総合的な学習の時間を「龍頭学習」と呼び、研究教科としてカリキュラムマネジメントの本丸に据えている。そして、ここに防災教育の視点を加え、関連性を持たせることで、学校教育全体の中で防災教育の推進を図ってきた。中学年のテーマは「高齢者福祉」。地域の高齢者福祉センター「ひまわり」に通うお年寄りとの交流活動を軸として展開していくこととした。

〇総合的な学習の時間の展開

私は総合的な学習の時間を展開する際、いつも子供たちの認識との「ズレ」を取り上げることになっている。このことで、より主体的な学習につながると考えるからである。本年度の「龍頭学習」も、まず

「ズレ」から始まった。子供たちに「ひまわり」を訪ねることだけを伝え、これまでの経験をもとに交流を企画するよう投げかける。なぜなら子供たちは低学年時に訪問経験があるからである。子供たちは意気揚々と遊びを考え、必要な道具を準備して交流に出かけた。しかし、いくら説明しても聞き取れないお年寄り、場所を移動してもらっただけで時間がかかってしまうお年寄り、自分たちが思ったように進行できないという現実問題に直面する。何が足りないのかではなくか気づくものの、何が足りないのかまではわからない。そこから「お年寄りを知る」という学習が始まった。



「ひまわり」での老人とのふれあい

そこで日本赤十字社広島支部組織振興課協力のもと、お年寄りの体を疑似体験できる装具をお借りし、お年寄りの体を体験したり、安芸太田町社会福

社協議会から車いすをお借りし、車いす体験をしました。また、日本赤十字社開発の防災教育テキスト「まもるいのち・ひろめるぼうさい」から、授業に使える写真素材「あなたができること」にある避難所のお年寄りの写真を読み解かせ、お年寄りの思いについて考えさせた。こうした学びを通して子供たちは、お年寄りの体は自分たちが想像する以上に動きにくく、耳も聞こえにくくなっていることや、様々な思いを持ったお年寄りがいるということ車いすに乗った時に怖さを感じることがあることなどに気づいていった。

2回目の交流では1回目比べて、お年寄りの体をいたわる接し方をする児童がはるかに増えている。こうした中で「高齢者福祉の仕事」について興味を持ち始めた子供たち。「ひまわり」の職員さんの動き方を観察したり、福祉の仕事を紹介するDVDを視聴したりすることで、改めて、人を想い、それを形にして伝えることの大切さを知ることとなった。そこから、最初の交流における課題を洗い出し、今の自分たちにできることは何か、どうすればお年寄りがもっと喜んでくれるのか、模索が始まった。

○防災教育研究公開の実施

そんな中、本校の防災教育研究公開が九月末に実施された。中学年は「共助」をテーマに被災後の避難所生活について考える授業を展開した。静岡県開発の避難所運営ゲーム「HUG」をもとに、小学校中学年でもできるように作り変えた避難者カードを使用した。読み手が避難者カードの情報を読み上げ、後のメンバーが避難所の見取図上にそのカードを配置していく。様々な事情を抱えた避難者、想定外の

事件に対処させながら、思いやりある避難者配置や共同生活上のルールについて考えさせる授業であった。



HUGを使ってさまざまな考えを出しあっている児童

参加された保護者からは「子供たちが子供たちなりのによく考えていることに驚かされた。」「被災者の心には目に見えない災害が起きている。中学年がそこに思いを馳せていることが素晴らしい。」という声が寄せられた。まさに「他者意識」「共助意識」を持ち始めた子供たちの成長が、そこにあった。「自分だけではなく、みんな」という意識。それは「ひまわり」交流でも同じである。自分たちの思いだけで進めるのではなく、相手の思いを酌むこと。

自分たちもお年寄りも、みんなで楽しむこと。この豊かな「つながり」が、いざという時の助け合いとなり、セーフティーネットとなる。

○豊かな「つながり」のために

「つながり」の質を高め、豊かにするために、子供たちは自分ができることの幅を広げようとした。私は子供たちが「できるようにになりたい」と言ったことに外部からの指導者をつけることを考えた。「直接教えてもらう場」は、「人と人がつながり合う場」でもあるからだ。安芸太田町社会福祉協議会がつなぎ役となってくださったおかげで、折り紙やハンドマッサージ等、地域の達人が見つかり、実際に指導に来て頂くことができた。

中でも、数人の児童が「落語をやりたい」と言い出した時は驚いた。「なぜ落語なのか」と問うと、「笑ってほしいんです。お年寄りは体がしんどいから、少しでもそれを忘れてほしい。」と答えた。自分のクラスながら感動したのを覚えている。とはいえ、落語を教えてくれる人など、そう簡単には見つからない。ネット動画を見ながら落語を身に付けようと試行錯誤を繰り返していた子供たちの思いに添えて下さったのはアマチュア落語家・山笑亭こよんさん。小学生に落語を教えるのはとても難しいそう。落語一本は無理だが、小断なら…ということで見聞き受けて下さった。ネット動画を見て覚えるのを実際に稽古をつけてもらうのでは大違いで、子供たちはみるみる小さな断家になっていった。この「本物とつながる」体験学習が、子供たちの学習意欲を高め、自主練習に取り組むなど、自発的な活動に展開していった。

子供たちが「やりたい」「覚えたい」という熱を持って自発的に課題に取り組む。それに応えようという師匠の思いがある。そこに熱い「つながり」が生まれ、形になっていく。一つの形になったものが、またさらに「ひまわり」のお年寄りとの「つながり」を豊かにすることに発展していくのだと思う。

○おわりに

本年度の私の取組のキーワードは、まさに「つながりを育む」である。防災教育における「共助」について考える時、人と人が互いに生き残るいのちを想い合うということがベースとなる。人と人との「つながり」の質を高め、豊かにすること、いざという時にいのちを守る防災意識の涵養につながるというのだと考える。



「三笑亭こよん」さんに指導を受ける児童

筒賀小学校研究指定校発表会（防災参観日）に参加して（報告）

副委員長 河戸靖子



9月28日、筒賀小学校で教育研究会と防災参観日が開催された。この筒賀小研究会は、平成29・30年度の2年間、赤十字社広島県支部から防災教育推進指定を受け、広く地域や保護者の防災意識を高めるために実施されたものである。当日は二見吉康安芸太田町教育長と日本赤十字社広島県支部 黒川組織振興課長のごあいさつに始まり、当校研究主任・西廣教諭から2年間にわたる実践が報告された。

当校が防災教育に取り組む理由の一つに、地域が急峻な山々、谷川に囲まれた地形を有しており、地域には断層があることがあげられる。児童が地域のこの特徴を正しく知り、「もしも」に備える防災意識を育てるべく全校組織の取り組みとされたのである。また、県支部より防災教育推進指定を受け、教育の主軸に青少年赤十字の態度目標を据えての地域を巻き込んだ実践とされたのである。

全学年の授業公開も実態から生まれた独創的な内容であった。低学年が「自助」に重点を置き、地震が起きたら自分はどうするか、どう安全な行動をとるかを考えさせるものであった。中学年は「共助」に重点を置き、避難所の運営をシュミレーションして避難所のスロープの段差を「おじいちゃんだったら・・・」と、具体的に案を出し合っていた。高学年は「公助」の立場で、郷土全般に立ち自分たち

にできる事を立案し発表していった。



高学年「公助」パソコンを使ってグループ発表

P T A講演もユニークで、地域の住人である、清水正弘さんが、「21世紀の地球・人と人・人と自然の共生とはー関係性の場から湧き出づるものはー」と題して、アジア・阪神・東日本・ネパール等の被災地の復興支援活動に携わっておられる方のお話だった。地球上は美しく、仲間は大切、と話された。この講演会には高学年も保護者と一緒に参加した。この間、低・中学年児童は、「ぼうさいお話し会」に参加し、「じしんのとき、しんこきゅうして、おちつこう」などの五・七・五を作って学びを締めくくった。

閉会行事では、町教育委員会、萩原主幹より、「どの学年も協動的で、真剣に防災について考える姿が清々しく、心温まる研究会であり、その内容は

地域の人々にも役立つ貴重な研究会となった」と締めくくられた。

（実践報告）

「実行の人」とJRCは国泰寺の不易の取組

広島市立国泰寺中学校長 三浦義之

（広島県青少年赤十字指導者協議会長）

国泰寺中学校は昭和24年4月、校訓「実行の人」を掲げ、創立する。さらに、第2代加藤惣一校長の考えにより、社会や時代に翻弄されない本当の人間を育てる人道の理念を基盤とした学校づくりを目指し、昭和27年青少年赤十字に加盟。以来、校訓「実行の人」とJRCは本校の教育活動の中心的役割を担い続けてきた。そのような歴史がある国泰寺中であったが、私が赴任した平成27年当時、JRC活動は低調な状況にあった。JRCの理念である主体性を培う指導が統一的に取組まれておらず、一時期校歌でもあった「JRC歌」を知らない生徒や教職員、つまり国泰寺中のJRC活動の理念や歴史が共有されていない状況であった。

そこで、生徒の自主性・主体性を育むための取組であるJRC活動を国泰寺中の学校づくりの不易の取組として改めて活性化させるため、私はJRC態度目標と校訓を新たな学校経営目標に組入れ、「気づき、考え、行動する幸せを生む実行の人の育成」とし、まずは「校内研修」、「アセンブリ」、「ノーチャイム」、「VS活動の活性化」の見直しと実践から、取組を進めた。

1. 「校内研修」

教職員の理解学習として、JRC活動の記録を知ることから始める。広島市民賞の受賞、全国青少年赤十字の全国モデル校指定などが紹介されているビデオの視聴や加盟した経緯と歴史の研修を校内研修の中に位置づけ、教職員に国泰寺中の不易の活動であることを意識づける。



平成12年広島市民賞受賞

2. 「ア

センブリでのJRC歌の斉唱」

本校での生徒会朝会は「アセンブリ」といって、生徒主導で取組を進めている。これまでも「無言集合」の取組を進めているが、これに加えて以前は取り組んでいた今は途絶えていた「JRC歌」の全員斉唱を現在、毎回行っている。生徒会がリーダーシップを取っての取組であり、本校の伝統復活を目指している。

3. 「ノーチャイム」

自主性・主体性を育む取組として、普段の生活から取組む活動として新たに「ノーチャイム」に取組んでいる。開始に当たり、課題が多いとの声もあったが、何のために実践するのかというねらいを強調し、実施に踏み切った。現在、生徒自身の主体的な行動を生んでいる。

4. VS活動の活性化

以前より続けている「VSカード」の取組をさらに充実させ、VS活動への参加率を向上させるため、VS強化ウィークを設定し、広報活動を積極的に رفتり、さらにVS活動の選択の幅を広げ、気軽に参加できる工夫をし、参加者の増加を図っている。



花の植え替えV.S

最近では西日本豪雨被害への義援金活動、ボランティア・ボランティア雑巾を被災地へ送る活動を生徒会で行った。さらに物資を送る作業ボランティアにも参加募集し、取り組んだ。



救援物資の仕分け作業ボランティア

「気づき、考え、行動する幸せを生む実行の人の育成」として、取組の見直しや新たに進めている実践により、目的意識が生徒・教職員に芽生え、活動への多くの参加者を生み、学校づくりは自分たちの手でという意識を生んでいる。校訓とJRCの目標が重なり合う理念の下で生まれた生徒と教職員による成果であると実感している。

（実践報告）

青少年赤十字県大会から全国へ 全国高等学校総合文化祭（信州総文祭二〇一八）ボランティア部門参加報告

広島県立安芸高等学校教諭 前平芳延

広島大会から二年が過ぎ、今年も全総文の時期がやってきました。今年の総文祭の舞台は長野県。ボランティア部門は広い長野県の南部に位置する駒ヶ根市を会場として、八月八日から十日までの三日間、全国二十三道県から四十八校の生徒を迎えて開催されました。

昨年のみやぎ総文後に、秋に行われる青少年赤十字広島県大会を全総文への選考資料とする大会と位置付け、結果最優秀校が宮島工業高校、優秀校に舟入高校、福山明王台高校、そして出場枠が六校十二名ということで、日頃の活動実績から、安芸高校、廿日市西高校が長野県への派遣校となりました。駒ヶ根市までは、乗り継ぎを繰り返して、到着したときには夕方になっていました。会場で活動報告の模造紙などを見学し、川沿いの宿泊施設にて旅の疲れを癒しました。

活動報告をする宮島工業高校を除くメンバーで開会前の時間を使い、バスで駒ヶ岳に上り、雄大な景色と自然を満喫したあと、初日の開会行事に参加しました。チェルノブイリ原子力発電所事故後の医療支援活動の経験を持つ松本市の菅谷市長の「21世紀を生きる君たちへの期待」という講演で自身の経験を踏まえたボランティア活動で心がけてほしいことや、これから生きる生徒たちへのエールが送ら

れました。その後、各県一校ずつの参加校による活動報告がおこなわれました。その後、二日目のワールドワークの事前学習を行い、夜に帰った宿舎では、親睦を深めるための交流会が開かれました。

長野県の工夫として、例年宿泊がバラバラで昼間のみの交流だったものを、なるべく宿舎をまとめて、夜の時間の交流を増やし、初日の交流会、二日目のフィールドワークのまとめなどをじっくり取り組むトレーニングセンターのような環境をつくられているのが印象的でした。長野県では、全総文開催前から、JRCを中心にボランティア系の部活動が全県的な福祉専門部として活動しており、運営校が二十六校、運営協力校を含めると三十校近くの生徒が全国の生徒をもてなしてくれました。



交流会の様子

二日目のフィールドワークは6コースに分かれており、安芸高校の生徒は、廿日市西高校の生徒とともにJICAの研修施設での国際親善をテーマにしたコースに参加しました。宮島工業高校、福山明王台高校の生徒は、駒ヶ岳と駒ヶ根市の商店街を歩き、地域の特徴を生かしたまちづくりを探りました。舟入高校の生徒は、「限界集落について考える」をテーマに、交流をしながら村の課題と解決策を考えました。それぞれのコースで、最終日の発表に向けて、まとめと発表準備の作業を行い、遅くなるところは宿舎で作業を引き続き行っていました。

最終日は、広島県のメンバーは帰路の列車等の時間もあり、会場に展示物を取りに行くだけで、閉会式まで参加できなかったのは残念でした。そして、昨年度もそうでしたが、この総文祭でつながった生徒たちは、高校協議会の役員生徒も多く、昨年に引き続き有志で献血ルームでの献血呼びかけ活動を行うなど、さまざまなボランティアを自主的に協力して行う場面が増えました。

彼らの活動をさらに強化するため、賛助奉仕団の日高先生の発案と野田先生の協力、県支部の皆さんのご尽力で、本年度から青少年赤十字県大会での救急法競技会が実現できました。今年の県総文は活動報告と救急法の二部門で実施でき、さらに救急法競技会については、事前の学習会を踏まえて、各学校でも事前練習を行って臨むなど、目標をもって、活動を充実させることができました。



救急法競技会のための事前研修会

また、昨年度から広島県高等学校文化連盟がひろしまFM（HFM）とタイアップして行っている「大窪シゲキの9ジラジ」で県総文の各専門部を紹介する「9ジラジ総文部」に今回の信州総文に参加し、県大会を終えたばかりの舟入高校、安芸高校の生徒が出演しました。各学校の活動や、長野での様子、赤十字活動の紹介を十分程度しっかりと、そして楽しく行ってくれました。

来年度の全総文は佐賀県で開催されます。昨年今年と視察や次回開催県として準備をされている姿が、広島大会のころを思い出させてくださいます。また新たな出会いと発見、そして生徒たちの活動の起爆剤になってくれると考えています。

本年度の県総文結果は、最優秀校が舟入高校、優秀校に宮島工業高校、崇徳高校の二校。これに活動



ひろしまFMのスタジオで放送中のひとこま

報告部門3位の福山明王台高校と日頃の活動を認められての安芸高校、廿日市西高校の6校が高文連の推薦を得て、来年度の佐賀大会に出場する予定です。県総文への参加校が今後も増えて、多くの学校が切磋琢磨しながら、そして協力しながら盛り立てる広島県の高校での青少年赤十字活動を目指したいと思います。



00000-00000

（赤十字指導者の寄稿）

防災セミナーのすすめ

日本赤十字社広島県支部指導講師

広島レスキューバイク赤十字奉仕団

朝野千明



平成30年七夕前日。西日本に
停滞した梅雨前線の影響で広島

県地方は豪雨に見舞われました。JRは午後からの
運転を休止し、自動車通勤の私も上司の指示で16
時過ぎに退勤しました。通常であれば19時前後に通
行する広島市安芸区の矢野地区は、その時間には道
路が激流の川と化し、数分につけて全く通行できな
い状態となり、警察官を含めた複数の方が命を落と
されました。私が住む呉市ではいたるところで道路
が寸断され、完全に陸の孤島となり、日赤医療救護
班は呉市天応地区に船で上陸するなど、被災地への
救援も困難な状態が続きました。

消防、自衛隊、警察などの人命救助や、ボランティ
アも含めたあらゆる支援の手が被災地に差し伸べら
れ、「人が人を助けたいと思う気持ち」にあふれた
行動を目的にしました。学生奉仕団が街頭立つ
と、あつという間に義援金が集まり、ボランティア
センターには灼熱の中、全国から人が集まりました。

一方、防災関係者の中には厳しい意見を述べる人
も居ます。水害や土砂災害の場合、ハザードマップ
で警戒地域に指定されるなどしており、ある程度危
険が予測されている場所での被災が少なくありませ
ん。つまり事前に情報を収集し、的確な避難行動を
とっていれば助かるはずの命が失われた、というの

です。技術的な側面から言えば、正しい分析だと思
いますが、それを聞いて私は残念な気持ちになりま
した。みんながみんな、高い防災知識を持って暮ら
しているわけではありません。



遮断された通勤路、手前では救助活動中（筆者撮影）

広島県呉市は、その地名が「九つの嶺」「九嶺」
「くれ」に由来するとされます。周囲を急峻な嶺に
囲まれ海に面した呉には殆ど平地がなく、土砂災害、
水害、高潮の被害を受けやすい土地柄で、度々災害
救助法が適用されています。それにも関わらず、こ
れまで「瀬戸内は住みやすく災害が少ない場所」
という発言が少なくありませんでした。西日本豪雨
災害で多数の犠牲者を出した広島県。その原因の一

つとして注目されているのが、「避難行動の遅れ」
と、その原因である「正常性バイアス」です。もし
かすると飛行機が墜落してきて死んでしまうかも知
れない、と絶えず心配しては、不安で暮らして
いられません。そこで人間は、「自分が大きな災い
に見舞われる」ことに関して、無頓着です。宝くじ
に当たる確率は限りなく小さく、南海地震の発生は
確実に起こる、と知らされていても、何故か防災グッ
ズではなく宝くじを買ってしまいます。

この正常性バイアスを打ち破り、的確な避難行動
につなげるのにお勧めなのが、DIGと呼ばれる災
害シミュレーションゲームです。ご近所の避難計画
マップのようなものを自分たちで作成するものです。
指定避難所があっても、自宅からの経路が浸水地域
になっていけば、そこは避けなくてはなりません。
日赤では県内各地で防災セミナーの一部として普及
を進めています。

平成26年には広島市で大規模な土砂災害が発生し、
日赤医療救護班も被災現場での救護活動とあわせて
避難所の巡回診療も実施していました。広島市立可
部小学校には多数の方が避難生活を送られていまし
た。印象的だったのは、避難所となった学校のトイ
レを一人で黙々と掃除されている先生の姿でした。
夏休みの職場が一転避難所となり、学校の先生も公
務員として避難所運営に関わることが求められます。
災害は、その全てが「想定外」であり、事前の準備
には限界があります。だからこそ、あらゆる状況に
柔軟に対処する心や技術の準備が必要です。DIG
（避難所運営ゲーム）と呼ばれるトレーニングもあ
り、自主防災会などと共に、学校の先生や先生を目

指す学生の皆さんにも、是非お勧めしたいと思います。

（地域奉仕団の活動）

福山市赤十字奉仕団活動報告

委員長 過田 悟

福山市赤十字奉仕団では、平成9年11月23日に福山市ボランティア赤十字奉仕団として設立し、福山市ボランティア連絡協議会の会員が赤十字奉仕団員として連携して活動した。

そして、平成26年4月19日に赤十字奉仕団活動に賛同するボランティアグループの会員と個人加入で名称を福山市赤十字奉仕団に代え、日本赤十字社広島県支部福山市地区事務局を担当する福山市社会福祉協議会と連携して活動している。

活動の一環として、毎年のように大規模な自然災害が発生している中、3・11東日本大震災・山口県・茨城県常総市の台風大雨災害・広島市大雨災害・熊本県、鳥取県中部、島根県西部の地震災害・福山市大雨災害・西日本豪雨災害の被災地や被災者宅の復旧支援活動に、奉仕団員を中心に災害支援市民協力者と可能な範囲で積極的に参加している。

被災地や被災者に作業資機材・物資の提供及び義援金と海外の自然災害にも救援金を実施している。

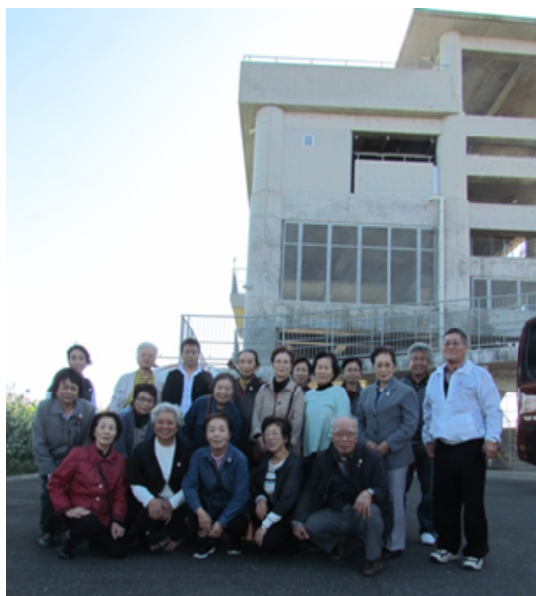
福山市赤十字奉仕団では研修の一環として、東日本大震災の被災地宮城県と福島県に5回・広島市1回・熊本県と福岡県にも1回、被災地の復旧復興状況視察と被災者との交流を継続して実施している。

また、奉仕団員の研修会や一般市民及び各種機関

にも参加を呼びかけ、東日本大震災の被災地から被災者を講師にお迎えして、貴重な講演会を3回開催し、自然災害について意識の高揚につなげている。

平成30年は、南海・東南海巨大地震に対し、災害防止に取り組んでいる日本赤十字社高知県支部を訪問して、高知県職員から防災の講話を受け、津波対策で造られた津波避難タワーを見学した。

講話・見学を通して、福山市民の意識の高揚を高め、地震・津波の早急な対策が必要であると感じた。



（賛助奉仕団員の活動）

第1回広島県高等学校救急法競技会について



副委員長 野田 崇

近年の自然災害の多発に対して、ファーストエイド（急

な病気やケガをした人を助けるためにとる最初の行動）の重要性が指摘されています。救護体制が組織的にも実技的にも不十分と認識しています。救急法の普及拡大や事故発生時の実際の行動（バイスタンダー）に移せるためにも、まずは、高校生の救急法競技会開催をJRC指導者協議会高校部会の先生方と協議して決定しました。

競技会の事前研修会を高校トレーニングセンター中に実施する予定でしたが、7月の西日本豪雨災害が発生し、日赤広島県支部は救護・救援体勢を築くため、小中高校全てのトレーニングセンターが中止となりました。しかし、高校指導者協議会は救急法競技会を実施することとして、9月15日高校協議会の当日特別の時間をとり、事前研修会を行いました。当日生徒・教師は実技と同時にビデオカメラで録画をしていました。

10月27日（土）に青少年赤十字広島県大会を広島市立国泰寺中学校で実施しました。午前中は全体集会以、幼保・小・中・高各校の取り組みについて発表があり、午後の高校部会で救急法競技会を実施しました。

競技内容は次のとおりです。

1 AEDを使用する心肺蘇生法

2 三角巾を使用する包帯法

3 ロープの結索法

参加者は5校15チーム45名の参加でした。1チームは3人で、競技内容によって違いがありますが、例えば、心肺蘇生法の場合、一人は患者役、一人は救護役、もう一人は援助者役を行います。実施方法は前記1から順に5チームずつ3回で終了し、2、

3へと実施しました。審査員は日赤救急法指導員5名、教員2名で厳正に審査をいたしました。



三角巾による頭部包帯法（競技）



AEDを使った心肺蘇生法（競技）

各チームとも事前に十分練習を積んできていることが一見で分かるほど内容に取り組みと同時に3人のチームワークも抜群でした。審査結果は6位まで表彰されました。

現在救急法については、何度かどこかで学んではいますが、いざというとき躊躇したりパニックになつて何もできないということがあります。それには何度も練習して習熟し、身体が自然に動くということが重要です。競技会は必然的にこの習熟を図ることができる機会になると考えるからです。実際に実施してみても、生徒たちの習熟度には目を見張るばかりでした。

今回は高校生を対象としましたが、将来的には赤十字奉仕団や一般の人々を対象とした競技会に発展すればと考えています。

開催に当っては赤十字安全奉仕団の救急法指導者の皆様に全面的に協力いただき、深く感謝いたします。

地域における防災活動について



委員長 日高敬司

東広島市では全市あげて自主防災組織を立ち上げるよう市からの指導があり、居住している地域でも5年前に八本松南4・5自主防災会（戸数は約500軒）が発足しました。不肖私が会長を仰せつかりました。初年度は年度途中でもあり、役員選出に止まりました。

2年目は先進地域の活動見学や社会福祉協議会主

催の防災研修（8回）参加させてもらいました。そして、役員および班長により地域の危険場所を特定し、防災マップを作成しました。全戸に配布しました。ここで問題になったのは、「このあたりは危険だ」と判断してマップを作成し全戸配布したところ、一カ所「ここをどのような根拠で危険なのか」とクレームがつき、再度作成し直したことです。公的機関が危険箇所と指定していない限り安易に載せることの問題に気付かなかったことです。

3年目は地域の消防署と連携して防災訓練をしました。訓練会場は避難所に指定されている地域センターです。当日は一時集合場所に各班ごとに集まり、班長の引率で会場に移動します。この移動も訓練の一つになっています。110名の参加がありました。訓練内容は、水消火器による消火器使用訓練、AEDを使用した心肺蘇生法、竹と毛布を使った担架、毛布だけの担架などです。

4年目は、消火訓練、煙体験、119通報訓練、応急手当として三角巾による包帯法などを行いました。参加者は150名でした。

そして、救急情報BOX（別名 命の宝箱）を東広島社会福祉協議会から提供を受け、これはJ A広島中央および東広島医師会が作成されたもので、幸いに当地区には全戸に配布させて頂きました。この救急情報ボックスは写真の通り、プラスチック容器の中に血液型、持病・服薬情報等を書き込み、冷蔵庫の中に保管するとともに、ステッカーを玄関扉の内側と冷蔵庫の前に貼っておきます。緊急で救急車を呼んだ際は、救急隊員はこの「命の宝箱」を見れば必要な措置が取ることができるというものです。

救急医療情報

記入年月日 平成 年 月 日

ふりがな氏名	(男・女)		
生年月日	明・大・昭・平	年	月 日
血液型	A・B・O・AB 型	Rh()	
住所			
電話番号			
治療中の主な病気	病 名	病院・医院名	
服用している薬	薬剤情報提供書があればお入れください		
アレルギー	なし・あり()		
手術歴			

緊急連絡先	①氏名	TEL - -
	(続柄:)	携帯 - -
	②氏名	TEL - -
	(続柄:)	携帯 - -
③氏名	TEL - -	
	(続柄:)	携帯 - -

医療行為(検査・診断・治療)に当たって、医療者が本人以外に説明および同意を求めるのに最適な人を①にご記入ください

その他	医療機関に伝えてほしいことがあれば、自由にお書きください
-----	------------------------------

かかりつけ医療機関の診察券(写し)・健康保険証(写し)・写真(本人確認用)を一緒にお入れください

※ この情報は、本人の救急医療の目的以外には使用しません

救急医療情報 (お薬手帳の写しも同時に入れる)

今年度の防災訓練は幸い

広島県は30年7月6日の西日本豪雨災害で大きな被害が発生しました。この日私は東京で開かれた全国会議の最終日で広島

にも当該防災会では被害はありませんでしたが、同じ小学校区で被害が出ている中であって問題意識を喚起することが重要だと考え、地域自治組織の広報委員長から被害状況のビデオによる映像と全概要のまとめをしていただきました。そして、気象予報士・防災士でもあるFM東広島パーソナリティの井上葉子さんから、今後の防災意識と題して講演をしていただきました。

東広島市は山陽本線の中で最も高い標高にあり、地震以外は余り問題がないものとして過ごしてきましたが、今やどこが安全という場所はないものと考えた方がいいことを痛感しました。また、地域の特性をよく知ってそれに対処するということだけではなく、旅行中に災害に遭うかも分からないことを想定して日頃から防災に関する知識を取り入れることや、地域の防災訓練においても様々な展開をする必要があると考えます。

「郷土愛」を育てる心のお手伝い
絵手紙と俳句作りを通して
副委員長 河戸靖子

私たちは仲間と集う場所では、「誓いのことば」をお互いの目を見つめ合って誓う。その中に「郷土社会のために・・・」という一節があるが、これを国語・社会科等の授業に生かせないだろうかとか常々考えていた。私はそれを国語の「俳句」に取り入れて実践してきた。

初夏の朝、筒賀小学校3・4年複式学級を訪ねた。

もし避難しなればというときこの「命の宝箱」があれば医療スタッフやボランティアにとつて有用な情報ということ。このプラスチックボックスは専用でなくても1000円ショップで縦11cm直径8cmのプラスチック容器が2個1000円で販売されていました。「ステッカー」と「救急医療情報」は自作できますので、是非とも各家庭において用意されたいと思います。



命の宝箱 ステッカー

今日は、西廣先生とT・T（ティームティーチング）で俳画作りを指導する日である。

まず、教室に西廣先生と私とで郷土の植物や魚など、季語になるものを並べた。花や野菜、アユやさくらんぼ、びわ、ぶどう等の果物がこの活動の教材である。これを見た児童は、日ごろ見たり食べたりして珍しくはないはずなのに、「わっ、このアユ、本物だ!」「これ、おいしそう!」と歓声を上げた。この歓声が俳画への意欲につながる。そして、迷いながらもじっくりと自分が描きたいものを選び、手に取っていった。児童は、これらの郷土簡賀の初夏の品々を見つめながら俳句作りをする。



絵手紙授業風景

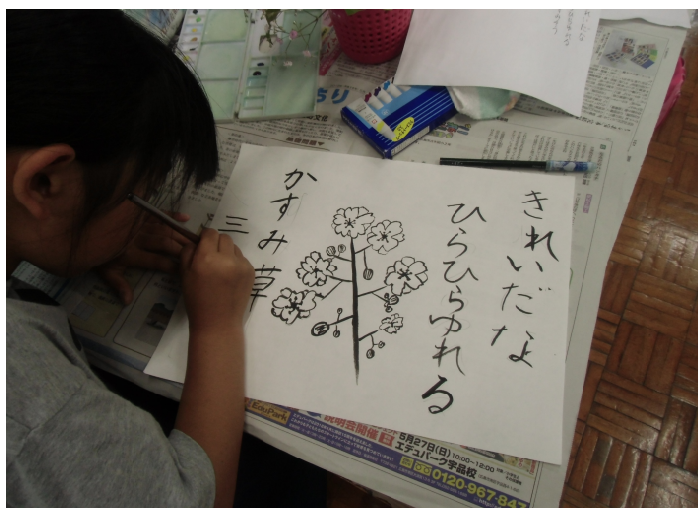
画面いっぱい筆と墨で写生し、俳句を添え、絵の具で彩色をしていく児童の顔は、実に生き生きとしている。最後に自分で作った落款を押して発表しあい完成。特に、家族が登場する俳句を西廣先生に

認めていただいた児童は、照れくさくても嬉しそうである。

郷土愛を俳画作りから育んでいこうと続けているこの活動をなかなかやめるわけにはいかない。3・4年生の子どもたちの笑顔に見送られて学校をあとにした。

（子どもたちの俳句）

さくらんぼ なかく二人 ならんでる（3年）
生ぐさい おおてみたよ このあゆを（3年）
かわいいな 黄色い色の ひまわりよ（3年）
川の中 そよそよ泳ぐ あゆのむれ（4年）



廿日市市立四季が丘中学校登録式に参加して

副委員長 山中章敬



5月11日に廿日市市立四季が丘中学校で青少年赤十字登録式が行われ、広島県支部職員

の西本さん、森川さんと参加してきました。校長（教頭）先生のお話のあと、青少年赤十字について次のような話をさせていただきました。

「誰にでもある困った人や苦しんでいる人を見ると何かをしなければならぬという心を実際の行動まで高めていくことを大事にしているのが青少年赤十字です。まずは、身の回りで、班の中や、クラスの中でいやな思いをしている人や困っている人がいたら改善するために行動しましょう。困った人や苦しんでいる人だけではなくより良い学校生活をするためにはどうしたらよいか考え行動しましょう。さらには、地域、社会、あるいは地球的規模で活動ができれば素晴らしいことです。今日の登録式は、四季が丘中学校の生徒一人ひとりが青少年赤十字の一員としてこの一年を「気づき、考え、実行する」を態度目標として活動することを決意する場です。皆さんがんばりましょう」以上のような話をしました。

四季が丘中学校の平成三十年度の生徒会スローガンは『四季飛躍』Ⅱ「より良いものに」という明瞭簡潔なものです。「個人の力、学年の力、四季中全体の力があるからこそ四季中はある!みんなでワンランクアップ!」という思いで設定されたこのスローガンは、次のステップに向けて頑張ろうとい

う意味があるそうです。

このスローガンのもとで行われた青少年赤十字登録式では、青少年赤十字のメンバーであることを自覚し、一人ひとりを大切にし、さらに、より良い学校にするために「気づき、考え、実行」する態度でこの一年を頑張ろうということを確認し一人ひとりが登録しました。（登録式の間ではクラスの代表）登録式は整然と行われ、終わりに生徒全員で「空は世界へ」を合唱しました。四季が丘中学校の今後の活躍が期待され頼もしく感じられました。

平成30年度青少年赤十字賛助奉仕団活動報告



幹事 寺田 宣文

4月11日 会計監査、第1回役員会
4月20日 青少年赤十字賛助奉仕団総会
4月20日 青少年赤十字指導者協議会総会
5月3～5日 フラワーフェスティバル参加
6月11日 広島県赤十字奉仕団委員長会議
6月30日・7月1日

青少年赤十字指導者研修会（指導者トレセン）

7月5・6日 全国賛助奉仕団総会（東京）

9月28日 簡賀小学校研究発表会（青少年赤十字研究推進校）参加

10月11・12日 中四国ブロック青少年赤十字賛助奉

10月27日 仕団連絡協議会・研修会（山口市）
青少年赤十字県大会（広島市立国
泰寺中学校）

12月13日 第1回機関紙編集会議

12月7日 第2回機関紙編集会議

2月15日 広島県青少年赤十字研究会

2月17日 広島県赤十字ボランティア研修会

3月27日 第2回役員会・機関紙送付作業

・県内の幼保小中高校JRC加盟校の登録式に参加
（13校へ4名）。

・平成30年度表彰校へ表彰状伝達（20校へ3名）

・地域奉仕団と協力してJRC活動の普及。

平成30年度青少年赤十字賛助奉仕団総会（報告）



幹事 采谷宣子

今年度の総会は、4月20日午前10時から日赤県支部において開催しました

1 平成29年度事業及び会計報告について

会計監査は、4月11日午前9時30分から日赤県支部にて行い、同日役員会で承認を得た後、総会において事業報告と合わせて報告し、承認されました。

2 平成30年度事業計画及び予算について

総会で承認され、総会資料を送付しました。

3 今年度の事業等について

・旅行など親睦を取り入れたものとするため、昨年

度申し合わせ通り、中四国ブロック大会にできるだけ多く参加することを申し合わせました。

・いとすぎプロジェクトの推進のため、いとすぎの苗を育て、県内の学校に植樹する活動を昨年度に引き続き推進します。

・夏のトレーニングセンター、指導者協議会、県大会、各研修会等への参加、日赤県支部の活動に積極的に協力することを申し合わせました。

平成30年度中国・四国ブロック青少年赤十字賛助奉仕団連絡協議会・研修会（山口大会）

幹事 寺田 宣文

この会は、中国・四国9県の賛助奉仕団相互の連絡協議を図り、青少年赤十字活動の普及発展に側面から支援することを目的に、毎年1回、各県支部・賛助奉仕団が持ち回りで開催しています。30年度は、山口県支部と山口県青少年赤十字賛助奉仕団が準備・運営に当たられ、10月11・12日に開催されました。広島県からは、日高委員長、河戸・山中・野田の3副委員長、采谷・寺田の両幹事の6名が参加しました。

（1日目）

山口県賛助奉仕団の蔵本隆博委員長の歓迎のあいさつで、「志を同じくする9県の賛助奉仕団員が手を取りあい研鑽に努めよう。」の言葉がありました。どの県も団員の高年齢化と活動の行き詰まりへの危惧を持っており、若返りと活動の活性化を模索して

います。その意味でも他県の同志との意見交流を通じて、新しい活動を見つけ出したいと思いました。

（記念講演）

グループ協議に先立って、山口県驚流狂言保存会の米本太郎氏による記念講演がありました。山口県は、幕末から明治維新にかけて日本をリードしていった多くの志士や政治家を輩出しましたが、山口市を見ますと、室町・戦国時代から山内氏支配のもと、京文化を取り入れ、西の京都といわれる政治と文化が花開きました。能楽でも日本の3大狂言の一つがこの驚流であることを知り、その伝統継承に努めておられるお話には大変興味を覚えました。

（班別協議会と全体発表会）

青少年赤十字加盟の幼・保・学校の加盟率をみると減少や伸び悩みに直面している県が多くある中で、徳島県は現98%で100%をめざしているといえます。指導者協議会との連携や県教委の協力を推し進めていることは素晴らしいと思いました。

賛助奉仕団独自の活動の模索も多くの県で行われています。鳥取県は広報活動に、愛媛県は「赤十字の思想を普及する部会」を立ち上げて、イトスギ育成から学校への植樹に力を入れています。広島県でもイトスギ育成と植樹に力を入れたところですが、育成に四苦八苦の状態で、なかなか進んでいません。島根・岡山・山口では既に実施している「救急法競技会」ですが、広島県も30年度から「高校生救急法競技会」を実施しました。これを学校だけでなく地域にも輪を広げようと考えています。特に、広島県は災害が頻発していますので、何としてもこの競技会の発展と普及に努めていきたいものです。

人道紙芝居を作成し多くの機会で上演している徳島県賛助奉仕団の活動、教材としての資料を17編も作成している愛媛県賛助奉仕団、防災教育推進の中心となつて支部と連携のもと活動している香川県賛助奉仕団などもあります。

賛助奉仕団員の加入促進は、自分の足元を強固にする面でも、また活動の幅を広げるためにも欠かせません。教員退職者に限らず日赤・病院など幅広く当たっていく必要を感じました。

グループ討議で出された課題や新しい試みは、全体会で発表されました。年1回の連絡協議会と研修会は中四国9県の賛助奉仕団の仲間意識を高め、相互の意識高揚を図るためには欠かせないものであると思います。9県支部は、この会の開催を2年に1回にしようと提案していますが、賛助奉仕団が開催と運営にもっと主体性を持ち、毎年開催を継続していく必要性を今回強く感じました。

（2日目）

まず、下関市立関西小学校と山口市立湯田小学校の実践報告を拝聴しました。

学ぶ力と豊かな情操は成長の両輪であり、支援し関



わっていく多くの人とのつながりが接点となつてさらに成長していきます。両校とも、あいさつ・美しい学校・チャレンジを目標に掲げて、青少年赤十字の目標と合わせた実践を積み重ねていることを強く感じた実践発表でした。

（実践校訪問）

実際に、現地の学校である湯田小学校へ歩いて訪問し、児童のいろいろな活動の実際を見させていただきました。

「湯田小学校の一員として、青少年赤十字の一員として、一人の人間として、気づき・考え・実行する」を掲げたその活動は実に具体的に児童にもわかりやすく入っていくものだと感じました。特にVS活動は高学年になりにしたがって特に時間を設けなくとも、気づき、人のため・学級のために行うものであるといつも呼び掛けているとのことでした。

ちようど、近くの老人ホーム共済苑訪問のために高学年がハンドマッサージの練習をしていました。お年寄りとお話をしながらハンドマッサージをすること。今日は、我々、中四国ブロックの参加者がお相手です。児童の手は温かく何とも言えない充実した時間のように感じたのは私だけではなかったと思います。湯田小学校の皆さんありがとうございました。

（明治維新150周年記念関連施設の視察と閉会式）

湯田小学校の訪問を終え、湯田温泉の多くの宿・ホテルが立ち並ぶ中を徒歩で移動しながら中原中也詩碑・山頭火句碑や明治維新関連の施設に立ち寄り、2日間お世話になったセントコア山口に戻り、閉会

平成29年度青少年赤十字加盟校数

(単位：園、所、校)

	全国		広島県	
校種	加盟校数	加盟率	加盟校数	加盟率
幼稚園	824		7	
保育園	839		28	
小学校	6,962	34.6%	142	29.1%
中学校	3,443	33.2%	90	33.6%
高等学校	1,893	38.2%	38	29.0%
特別支援校	166	14.6%	6	33.3%
合計	14,127	34.1%	311	30.5%

※加盟校数は「平成29年度青少年赤十字の概要」から掲載

式に臨みました。

山口県支部の皆様、賛助奉仕団の皆様、大変お世話になりました。ありがとうございました。

平成30年度青少年赤十字加盟概況
(加盟校数・加盟率)

平成30年度広島県賛助奉仕団役員

委員長

日高敬司

副委員長

大木 昭、河戸靖子

幹事

野田 崇、山中章敬

監事

采谷宣子、寺田宣文

顧問

吉丸朝美、下野鈴子

光本涼子、曾山和彦

田中 博、塚本晃史

平越幸男、水野善親

横田二郎

編集後記

平成30年7月6日広島県を襲った豪雨災害により多くの人命を亡くすとともに大被害を受けました。心からお悔やみ申し上げます。日赤広島県支部は直ちに活動され、また、多くの高校生がボランティアで参加しました。このため、例年開催されているトレンセン・日韓交流会も中止になり大変寂しい思いをしました。

編集方針は、昨年から幼保・小・中・高校の各種から投稿いただくこと、奉仕団からいただくことにしており充実した紙面になってきました。

念願であった救急法競技会が高校で初めて実施され多くの参加者と盛り上がりがありました。今や日本は災害列島と呼ばれる程になりました。貴重な一石を投じていただきました。

今年度の中四国ブロック大会は山口市湯田において開催され、七人が参加し協議会での意見交換や、下関市の小学校での実践発表や、地元の加盟校視察により刺激を一杯もらいました。

また、昨年度総会において新しく本会に入団された方により、本会も益々活気づいております。これから団員の結束をはかり、いとすぎの苗を学校に植樹する活動や、学校訪問、赤十字加盟登録式における講話など、赤十字活動の啓発に邁進したいと思えます。同時に、皆様の活動は機関紙を通してお伝えしてゆきますので、今後ともどしどしお寄せ下さるようよろしくお願いいたします。

○編集委員

曾山和彦、日高敬司、河戸靖子、野田 崇、采谷宣子、山中章敬、寺田宣文、河野和夫、吉丸朝美、原田樹雄

